
そんな二人は運命共同体

池魚籠鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そんな二人は運命共同体

【Nコード】

N5966D

【作者名】

池魚籠鳥

【あらすじ】

俺は生まれつき不運だった。彼女は生まれつき幸運だった。そして二人は互いに運を共有し合う。気付けば運命さえ…。二人は一体どうなるか。上手に出る彼女と下手に出る俺。そんな二人の結末は…？

第1話「幸運と不運と相殺と」(前書き)

何とか完結まで頑張ります。よろしくお願いします。

第1話「幸運と不運と相殺と」

「いい恨みつこなしだからね？」

「お、おう！」

「最初はグー……。」

「じゃんけん……。」「

」「ポン！」「」

俺は運が悪い方だと思う。運が悪いと言っても命に関わるような不運は全く、いや…たまにしかない。俺の日常には小さな不運が潜在的に潜んでいる。それに怯えながら日々平凡を願い細々と暮らすのが、俺こと風咩 恭だ。^{ふうせんきょう}あまり俺の名前には突っ込まないでもいい。

「うっ、寒い。」

最近めつきりと冷え込む季節となった。早く寝なくとも寒さで自然と早めに起きてしまう。特に布団の肩口から入り込む冷気が嫌いだ。これが好きな人がいるならば余程の風変わりだと言えるだろう。

「うえ、雪が降ってるよ。」

窓を覗くとまだ薄暗い中にちらほらと白銀の結晶が舞っている。ここいらは雪が積もりはしないものの、毎年のように雪が降る。雪が大量に降ってほしいとは思わないが、ないと寂しいものがある。だから俺はこのままでいいと思う。

「それにしても寒い。もう少し寝ようか。」

布団を被り直して二度寝の態勢になった。名前は忘れたが偉人の残した言葉にこんな言葉がある。

『朝寝ほど高い出費はない』

朝寝、つまり早起きなさいという教えなのだろうが、俺に言わせれば朝の二度寝ほど堪らないものはない。二度寝万歳だ。もしこの偉人と論争になったら論破してやる自信がある。それほどまでに素晴らしい時間が約束されるのだ。

「さあそのまま眠りなさい。そうすれば天国という名の永遠の安らぎが訪れるわ。」

「ふう、やはり早起きは三文の得と言うしな、…起きよう。」

「ちつ。」

棒読みに近い言葉を吐いた俺は命の危険を感じながらも起きることに成功した。もし目を閉じていたら、本当に二度と二度寝ができなくなっていた。背中には冷りと嫌な汗が吹き出ている。

「お、おはよう悠璃。良い舌打ちだね。」

「ちつ。」

この妖怪舌打ち女は俺のよく知る人物だ。

「悠璃？」

「ひい！？お、おはようございます悠璃様。」

東條悠璃^{とうじょうゆうり}。この俺にとって半ば運命共同体のような存在だ。有り体にいえば妖怪舌打ち女だ……もとい幼馴染みだ。

「遅いわ。」

「すみません。」

これは平謝りなどではない。心の底から謝っている。俺は悠璃には頭が上がらない。別に悠璃に媚びているのではない。

「お腹すいたわ。」

「今出来るから。」

朝食にしては少し早い時間だけど、俺は悠璃の分も含めた朝食をせつせと拵える。全然苦ではない。

「はい、どうぞ。」

「頂きます。」

極一般の献立の朝食を悠璃はほうばる。それを確認して俺も手をつけ始める。ふと悠璃は箸を止めた。

「40点。」

「ぐう。。」

「何？何か文句があるわけ？」

「め、滅相もございません。」

今日の朝食の採点である。辛口過ぎるのでは…とは言えない俺だった。ちなみに昨日は45点だ。

「いつになったら恭は私に満足のいく物をだしてくれるのかしら？」

「そ、それは。」

「それに朝ぐらい私が作って…。」

「それだけはダメだ。」

「そう。なら…早く私を満足させなさい。」

悠璃の目が鋭くなった。背筋がきりりと伸びる。

「はひ。」

それから悠璃は残りを黙々と食べ始めた。俺が頑なに悠璃の提案を拒んだ理由は俺にとってとても大事なことだ。悠璃の料理の腕前は俺などより格段に上だ。それでも俺が作るのは、俺の中の意地というかプライドだ。とにかく結局の理由はまた改めて話そう。

「早く行くわよ。」

時刻は7時半を回ったところで、俺達の通う高校までは歩いて20分も掛からない。制服に身を包んだ俺達は学校までの道のりを並んで歩く。

「寒いな。」

「そうね。風邪引いても看病なんてしてあげないから。」

「あはは…本当に見に染みる程寒いな。」

しばらく歩くと左右に開いた分かれ道に差し掛かった。いつもは右に曲がって通学している。一応どちらから学校には行ける。いつも通り右に歩いて行くと悠璃が立ち止まった。

「今日は左へ行くわよ。」

突然の進路変更だった。が俺は素直に従う。

「わかった。」

無事に学校に着いた俺達は教室へと向かった。2年3組と書かれた教室に入るとちらほらとクラスメートの姿がある。悠璃も同じクラスメートだ。

「おーはーよー！」

そこに無駄に元気で間延びした声の挨拶が聞こえて来た。

「おはよ。」

「うい。」

俺と悠璃は適当に流した。流された本人は少しいじけている。

「冷たいね…君ら。外も寒いけどさあ。」

あまり紹介したくはないが基本的に友達わやかずきの和矢一樹だ。基本的になのでたまに友達でなくなるが気にしないで貰いたい。

「それよりさ、今朝の事故知ってる？」

「事故？さあ知らないな。」

「お二人さんが毎日通ってる道で起きたらしいよ。確か三丁目の辺りで電柱にスリップした車が突っ込んだとかって聞いた。丁度いいさっきだっさ。とぼっちり食わなくて良かったな。ははは！」

一樹はそう言う自分の席にカバンを置きに行った。俺は少し動揺していた。何故ならあの道の途中にあるコンビニで消しゴムを買うと考えていたからだ。悠璃がああでも言わなければ何かしら事故の影響を受けていた。もし悠璃にああ言われなければひよっとするとひよっとしたかもしれない。

「悠璃。」

「気にしないことね。」

「ああ。」

「大丈夫よ、恭は私の言う通りにすれば上手く行くわ。」

悠璃は優しく笑った。俺はいつもこの微笑みに助けられている。

「恭が突発的に思ったことと私が突発的に思ったことはいつも逆なんだから、それさえ常に互いに共有し合えば最高の人生になるわ。」

俺はすこぶる運が悪い。不運な男。

彼女はすこぶる運が良い。幸運な女。

……そして、二人は 運命共同体。

第1話「幸運と不運と相殺と」(後書き)

もしよろしければまた読んで下さい。ご指摘ご評価お待ちしております。

第2話「噛み付けない犬と噛み付ける主人」(前書き)

遅れました。まあ読んで下さい。

第2話「噛み付けない犬と噛み付ける主人」

俺は次の授業の為に机から教科書を出そうと、手の中に入れて探している。次は日本史だった。

「日本史だからこれだな。」

俺は机の右側にある教科書を出そうとした。日本史の教科書は大きめなので間違いない。

「左の方よ。」

「え？」

隣の席から然り気無く悠璃は言ったがもう手にした教科書は机の上へと現れていた。

「さすがに間違わ……………」

俺は絶句してしまった。

「…保健体育。さすが歩く性教育ね。」

「ち、違う！ いや少し当たっているけど。ってそうじゃなくてだな。」

急いでもう一度探すと机の左側の方に入っていた。相変わらず俺は運が悪いらしい。それを嘆いても仕方がないが少しぐらい嘆いても罰は当たらないはずだ。

「ふう。」

我ながら深い溜め息をついてしまったなと思うが、別に良いだろ。

「あらどうしたの？そんな溜め息ついて。アンタに溜め息つくほど嘆くことなんてあるわけ？」

厳しい悠璃の言動に俺のガラスの心が傷付いた。その報復に出ようと俺は皮肉を言ってみる。

「ドSな隣人とか。」

「あらそう、ふふふ…誰のことを言っているか知らないけどドMな変態のアンタには丁度いいじゃない。」

「ま、負けるかこのくそ！」

「ほう、飼い犬が主人に噛み付くの？ほれこれをやらないわよ、ん？」

「そ、それは！？」

俺は迷っていた。人間としての誇りと威厳を守るか、犬になるかで答えはもう決まっている。

「わお、わお ん！」

「よしよい子ね。」

悠璃が手にしていたのは俺の好物のビーフジャーキーであった。
悠璃の手に頬擦りをするとう璃は俺の頭を撫でる。

「ほらご褒美よ。」

「わん！」

獲物にかぶり付く俺は本当に犬さなからであった。それは仕方がないことだ。俺の場合子供の無邪気さと女の涙、それからビーフジャーキーにだけは敵わない。

「アホ犬。」

「わん？」

日本史の授業が始まると、俺の気持ちは憂鬱だった。抜き打ちで小テストが実施されるからだ。

「ノーマークだ…。」

「最初から分かっていたら抜き打ちじゃないでしょ？バカね。」

隣の毒舌女王は涼しい顔で俺を罵倒する。それもそのはずだ。悠璃は頭が良い。学年で一番というほどではないものの、成績は常に上位に落ち着いている。一方の俺は普通。勉強はしないことはないが、してもテスト前などである。俺はそれでいいと思う。

「ま、でも四択式だから分からない問題でも勘で書けば当たるかもしれないな。」

テスト用紙が配られ俺は啞然とした。問題数は全10問と少ないが内容がかなり難しい。というかコア過ぎる。周りからも難解な顔をして唸っている者が多かった。数分間考えてはみたが答えが出るはずもなく、制限時間の15分が過ぎようとしていた。ここで俺は賭けに出た。

「全部“ア”だ。」

下手に適当な答えをバラバラに書いて全問はずれるよりはどれか同じ記号を書いた方が正解するかもしれない。

「ムフフフ…。」

我ながら良いアイデアだと思い、自然と爽やかな笑みが漏れた。

「気持ち悪いわ。」

「悠璃どうした具合でも悪いのか？」

俺は心配になり悠璃の顔色を伺った。顔色はそんなにも悪くないように元氣そうだ。一応悠璃の額に手を当てて熱がないか確認したが

熱もないようだ。むしろ冷やりとして気持ちがいい。心なしか悠璃の顔が赤っぱくなつた気がする。

「あ……アンタ本当にバカだね。」

「ん？」

「私は恭が気持ち悪いと言つたのよ。」

「…そうなのか。」

いつもそう言われていても面と向かつて言われると辛いものがある。ここは悠璃を懲らしめるために演技をしようと思う。

「恭？」

「……………」

「わ、悪かつたわ。いくら本当のこととはいえ、ストレートに言い過ぎたわ。もつと遠回しな言い方で…。」

「あーもう、ストップ、ストップ。もういいから謝らないでくれ。」

「あらそう、わかつた。」

「ぐうっ。」

この娘はなんという奴だ。真剣に謝っているのに天然で毒舌が交じってくる。才能といえば才能だが、なんと嫌味な才能だろうか。な
どと思っていると制限時間の15分が経過した。

「難しい問題だったわね。ほとんどわからなかったわ。恭は…聞くだけ無駄ね。」

「ってそこは聞けよ。例え無駄でも。」

「へえすごいわよ。無駄ではなようね。自分でわかってるだけ進歩したじゃない。」

「そ、そうか？まあ俺も日々成長しているからな。」

どこかしゃくにさわるが俺は褒められたみたいだ。ちょっと嬉しい。

「はあ…恭が羨ましいわ。ま、恭らしいけどね。」

授業終了のチャイムが鳴った。

「今日の授業はここまで。小テストは次の授業に返すな。ちなみに答えは全部“イ”だ。難しかっただろ？ハハハハハ！」

歴史の田辺はそう言うどと颯爽と帰って行つた。同時にクラスは落胆している。その中で一際落胆しているのは俺だ。我ながら良い作戦だと思つたが撃沈だった。

「ぐはっ。」

「普通に解けば一問ぐらい当たってたんじゃないの？」

「ま、まあこついつ日もあるさ。そういう悠璃はどうなんだよ？」

「私は全部“イ”って書いたけど。まあ恭が“ア”って言ったからそれはないと思ったし、何となく“イ”だと思ったしね。サンキューわんちゃん。」

勝ち誇った顔をしている悠璃にさすがの俺も腹が立った。

「謀ったな！？」

「まあまあそう怒らないの。またまたご褒美あげるからね？」

悠璃に詰め寄った俺ではあったが、悠璃の右手に輝くそれを見たら俺の怒りと理性は吹っ飛んでしまった。

「わおん！」

「ある意味幸せな奴ね。…………可愛い。」

第3話「小春日和」(前書き)

キャラをそろそろ増やそうかと思っています。

第3話「小春日和」

今日は日曜日だ。その響きだけで幸せな気分になれる素晴らしい日だ。こういう休みの日は家でじっとしているのが一番だと思う。俺にとって、外に出るといいう行為そのものに危険分子が潜んでいるため、おちおち出かけるのも嫌なのだ。

「窓の鍵よし、部屋の鍵よし。これで今日は…。」

「私と二人つきりね。」

「そうそう悠璃と二人つきり……ってそうじゃない！というかいつの間に？」

「昨日の夜からよ。」

「マジっすか？」

「マジっすよ。」

気付かなかった。いや気付けなかった。確か昨日の夜は寝る前にドアと窓の鍵が掛かっているか確認したはずだ。それに念には念で部屋の中も全て確認していたのに。恐るべし我が麗しの隣人だ。

「で、何しに来たんだ？」

俺は率直な疑問を悠璃にぶつけた。

「何かないと来ちゃいけないの？」

質問を質問で返すというなかなかの作戦で応戦してくるところはさすが我が永遠の好敵手だ。

「い、いやあこんな休みの日に俺なんかと過ごすのはつまんだろうなと思ひまして。」

「ふーん、そうね。」

「でしょでしょ。」

俺は急いでドアの鍵を外してドアを開けた。

「何してるわけ？」

「俺とここにいろとつまらないですからね。」

「つまりここを出ろということね？」

悠璃の目がきらりと光った。というか恐い。俺は逆鱗に触れたかなと思ったがここまで言ったら頷くしかなかった。

「そ、そ、そういうことかもしれません。」

俺は覚悟を決めて歯を食いしばった。

「なーんだ…それならそうと言えばいいのに。わかったわ。」

「えっ？」

一瞬耳を疑った。目から鱗とはまさにこのことだ。俺の命をかけた覚悟は無駄に終わった。だがそんなことより悠璃の方が心配だ。世界が終わる前触れだとも言うのだろうか。悠璃が素直に俺の言うことを聞くとはどうしても解せない。

「なら行くわよ。」

悠璃はおもむろに俺の腕を掴んだ。

「はい？」

今俺は恐らくかなり間抜けな顔をしているだろう。しかし今の俺にとってそんなことは重要ではなかった。

「行かつて家に帰るんじゃないのか？」

「違うわよ。外に出掛けるんでしょ？さっきここだとつまらないって言ったじゃん。」

さらに悠璃の腕を引く力が強くなった。華奢な体のどこからこのような力が湧いてくるのだろうか。

「いや、あれはだなそういう意味じゃ…。」

「はあ？」

「な、何でもありません！」

鬼だ。俺の目の前には鬼がいる。この鬼にこれ以上アドレナリンを出されるのは大変危険なことだ。今日のところは大人しく従おう。かくして俺の平穏な日曜日はどうなってしまふのだろうか。

「次はあっちね。」

「へーい。」

俺達は市街地のデパートまで来ている。割りと広くてある程度の物は揃っているので一日見て回っても飽きない。だがそれは買い物好きな人の考えであって、俺のような者にとっては当てはまらない。それでも何故悠璃にこうして付き合ってたっているかというところ……悠璃が恐い、からではない。その理由は気付いてしまったからだ。

「楽しそうな顔しやがって。」

誰に言うのでもなく呟いた。悠璃は楽しそうな顔であちこちを見て回っている。あんな悠璃の顔を見たらたまにはこうして休みにでも、悠璃とふらふら出歩くのもいいかなと思った。

「ふべらほお。」

「何それ？」

悠璃は呆れている。現在買い物も終わり、二人でお茶をしている。悠璃はロイヤルミルクティーで俺はエスプレッソを注文した。

「説明するほどのものじゃないけど、強いて言えば今日一日の疲労とかストレスを口から出す時に唱える呪文みたいなものだ。その日の困憊度によって数百種類の組み合わせがあるぞ。ちなみにさっきのは…。」

「うざったいからもついい。てかそもそも疲労とかストレスを口から出せるの？」

「出せる。出せるのだよ悠璃君。人間とは一見不便にできているみたいだろうが、実は万能なのだよ。それを引き出すまでが大変なんだがね、深層心理のそのまた奥にアクセスさえしてしまえば造作もないことはないね。ハハハ…ごめんなさい。」

「もう喋るな。」

少し俺は調子に乗ってしまったようで、眠れる獅子を起こしかけてしまった。少しだけ冷めたエスプレッソを一口飲んだ。嫌味じゃない苦味が口一杯に広がる。閑静な午後の昼下がりをこうして過ごすのも悪くないなと思う俺だった。通りを歩く群衆の賑やかささえもどこか趣きがある。寒空の下、一層に澄んだ蒼穹が眩しかった。

「な、何か喋りなよ。」

「……………」

「無視するなあ！」

突然の悠璃の怒声。俺はずっと窓越しに空を眺めていたようで悠璃の話を聞いていなかったみたいだ。

「悪い悪い、ちょっとぼーっとしてた。」

「そんなに……。」

「ん？」

「そんなに私といるとつまらない？」

悠璃の真剣な眼差しに俺は息を飲んでしまった。実直なまでの吸い込まれそうな色素の薄い目に本当にのまれそうだ。不覚にも美しいとそう思った。

「楽しいよ。だからまた来ような。」

「……………」

「ゆ、悠璃さん？」

今度は悠璃が黙ってしまっていた。俯いて何やら言っているようだが小さ過ぎて聞き取れない。

「きよ、恭がそこまで言うなら仕方ないわね。私が暇な時にもまた誘ってあげるから。」

「頼むよ。」

それからしばらく談笑を続けて久々の二人の日曜日を存分に満喫した。

そんな小春日和な一日だった。

第3話「小春日和」(後書き)

最近寒いです。なので皆さん風邪をひかないようお気を付け下さい。

第4話「弁当を食べよう」

「おはよ。」

「うい。」

俺と悠璃は各々の友達に挨拶をしながら教室の中へと入っていく。自分の席に着いて一息ついてしていると俺のよく知る人物が近付いて来た。

「一樹、うい。」

「おはよ、和矢君。」

「グッモーニング！」

今朝の一樹の挨拶は英語であった。普通に挨拶をすればいいものいつも捻ってくる。

「悠璃ちゃん今日も美人さんだね。恭は普通だけど。」

「あ、ありがとう。和矢君も毎日元気だね。」

それだけ言つと一樹は颯爽と自分の席へ行つてしまった。

「こいつは元気だけが取り柄みたいな奴だからな。」

「その元気を恭にも見習つてほしいものね。」

悠璃の口調が元に戻つた。俺以外の男子にはいつもより柔らかい口調で話すくせに、俺と話す時はいつも上から目線なのだ。突っ込んでも直す気がないと思うので俺はスルーしている。

「おはよユウ。」

「あ、沙那おはよ。」

會田沙那あいたさなこの娘は悠璃の親友だと思う。だと思つと言つたのは人様の親友を俺が決めるようなことはしないからだ。だがそれを差し引いても二人は仲が良いと思う。

「うい、ナサ。」

「…おはよ不運凶。」

「おいナサ、漢字が違つぞ。」

「意味が分からない。そつちこそ名前間違つてるから。」

俺と沙那はいつもこんな感じだ。仲が悪いわけではないし、よく会話もする。

「こつちのはあだ名だからいいだろ？」

「なら私のだってあだ名にする。」

「…それだけはやめてくれ。」

「じゃあそつちもちゃんと名前と呼んで。」

「うい。」

俺に付けられそうなあだ名の方が若干酷いような気がしたがその対等な条件を飲んだ。

「沙那そんなバカと話なんかしたらダメよ。」

「羨ましい?」

「な、な、何で私が!?」

「可愛いユウ。」

悠璃と沙那は何やら話しているが上手く聞き取れない。少し気になった俺は二人に訪ねてみた。

「何の話をしてるんだ?」

「何でもない!バカ恭。」

「恭が気にすることじゃない。」

「…すんげえ疎外感。」

俺だけ除け者みたいでかなり寂しかった。

時より差す冬の日射しは何とも堪え難いものがある。それに増して教室に効いた暖房の相乗効果で眠くなる。意識が落ちていく。

夢を見た。

「ねえ父さん、母さんはどうしたの？」

「母さんはなちよつとだけ遠い場所に先に行ってしまったんだよ。」

「それじゃあ直ぐにそこに行けば会える？」

これは幼き故の無知。

「そこにいけば会える。でもな母さんはまだ来るなと言ってるぞ。」

もつとこつちにいなさいつてな。」

意味も知らずにただ目の前の欲望に忠実だった俺の無粋な勘違い。

「どうして！？父さんは会いたくないの？母さんのところに行きたくないの？」

純粹過ぎる子供の何気ない言葉は最愛なる父を傷付ける凶器。

「会いたくない、と言ったら嘘になるな。…でもな俺達はまだいけない。アイツが命を掛けて残したものをもつと噛み締めるんだ。それに焦らなくてもその時が来れば…きつと。」

父親の威厳。

「きつと、逝けるさ。」

その偉大さにその時はまだ気付けなかった。

「…ん。」

あまり見たくない夢だった。それと同時にかなり見たくない現実が目の前にあった。

「もう昼休みに入ってるんだけど。」

その目で俺を見ないでくれと言えたらどんなに幸せなのだろう。時計を覗くと昼休みを5分過ぎたところだった。

「おお！飯だな飯。何だ悠璃まだ食ってなかったのか。んじゃ一緒に食うか？」

今日は開き直ってみる作戦にしてみた。

「死にたいの？」

「す、すす、すみません！俺の為に待つて頂いた拳句、このような暴言を吐いてしまい釈明の余地ありません。」

深々と頭を下げたが一向に何も語らない悠璃。最後の手段で土下座をしようとし始めた時だった。

「早く食べるわよ。」

悠璃はそう言うのと黙々と自分の机と俺の机を合わせてカバンから弁当を二つ取り出した。有り難いことに俺は毎日悠璃の作る弁当を貰っている。

「お、おい。」

きょんとした俺を余所に悠璃は既に席に着き俺を待つていた。

「いいから、時間なくなるからさっさと食べる。」

「は、はい。」

いつもならば完全に怒っていたはずなのに悠璃は何も言わなかった。

「今日もつまいよ。」

「そう。」

「……………」

会話が上手く続かなかった。悠璃は黙って食べている。俺が作る朝食なんかより断然にうまい悠璃の弁当を、俺は毎日食べては幸せな気分にしてもらっている。だが今日は悠璃の様子が違っていて、そっちが気になり正直あまり味が分からない。しばらく沈黙は続いたがおもむろに悠璃は箸を置いた。

「また見たの？」

「え？」

一瞬何のことだかさっぱりわからなかったのだが直ぐに何のことだか理解した。

「また夢を見たんでしょ？」

「…ああ。最近見てなかったんだけどな。」

「恭の様子がいつも違ったから。」

「そうか？」

様子が違ったのは悠璃だけではなかった。

「私にはわかるから、他の誰にもわからなくても私だけはわかるよ。」

「悠璃だっていつもと違ったぞ。」

少し誤魔化し気味に言ってみる。

「それは恭のせいよ。だから今度からはそついう顔するな。もししそんな時は私が話を聞くから。何分でも何時間でも聞くから、…そついう顔しちゃダメ。」

泣きそんな顔をしながら言葉を紡ぐ悠璃を見て心が柔らかくなった。

「うい。」

今日もまた救われた。

「悠璃も泣くなよ。」

「な、泣いてないわよ!」

悠璃はまた箸を取って残りの弁当を食べ始めた。それを見た俺も弁当を食べた。今日の弁当はいつもよりうまいような気がしてならなかった。

第4話「弁当を食べよう」(後書き)

今回はシリアスでした。たまにはいいんじゃないでしょうか。ではまた。

第5話「隣人の母」

「恭、先に帰っていていいから。」

時刻は放課後へとなっていた。大抵は一緒に登下校を共にしているそんな悠璃からの一言は珍しかった。

「どうかしたのか？」

「評議委員会があるの。だから遅くなるから先に帰っていていいわ。」

そういえば悠璃はこのクラスの学級委員長だった気がする。そして、その評議委員会は長丁場になることで有名だった。

「別に待っててもいいぞ。」

俺は特に帰っても用事がないので、のんびり図書室でも待っているかと思いきやそう言った。

「え、いいの？それじゃ待って…。」

悠璃がちよつと嬉しそうな顔で何かを言おうとしていた。がその時悠璃の携帯電話が振るえた。

「もしもし、え…うん…でも…あつ…わ、わかった言っておく。それじゃあね。」

通話が終了して携帯電話を制服のポケットにしまつて小さく溜め息をついた。

「電話誰から？」

「…お母さん。」

「悠さんがなんでまた？」

東條悠さん^{とうじょうゆうさん}。悠璃のお母さんである。悠さんにはいつもお世話になっている。毎日晚ごはんをご馳走になっているし、俺の保護者にもなってくれている。

「恭に買い物付き合つてほしいって。荷物持ちが必要だけど私帰り遅いから恭に手伝ってもらいたいみたいよ。だからお母さんに付き合つてあげて。」

「そういうことか。わかつたそうするよ。んじゃ先帰るな。」

「むう。私も終わつたら直ぐ帰るから。」

何故か少しむっとした悠璃を後にし帰路へと着いた。

「こんにちは。」

悠璃の家のインターホンを鳴らした。

「はあい。あ、恭ちゃんね。」

俺の声を確認するとエプロンを着けた悠さんが出迎えてくれた。色素の薄い目は悠璃とそっくりで全体も似ている。綺麗な女性だ。

「あ、あの…。」

「どうかしたの？」

「放して下さい。」

悠さんに会うに当たっていつも少し困ることがある。それはいつも抱きつかれることだ。嫌ではない。嫌ではないけれど世間的に痛い。女性特有の柔らかさは心地が良くてついそのままでいたくなる。しかしそこは分別をつけなくてはならないので我慢しなくてはいけないのだ。

「別にいいじゃない。今日は悠璃がいないんだから。」

「そ、そういう問題じゃありません。」

「むう…やだ。」

どっちが子供だか分からなくなる。

「あ、そうだ。悠さん早く買い物に行きましょう。」

半ば強引に悠さんを離して買い物へと促した。洪々悠さんは了解し、家の中に戻って支度をして出てきた。

「恭ちゃんと買い物なんて久しぶりね。だから私今日はおめかしするのがんばったのよ。」

「いや、がんばらないで下さい。デートじゃないんですから。」

「似たようなものじゃないの。」

悠さんはそういうと俺の腕をとって腕を組んだ。明るくて笑顔の素敵な悠さんを見ると、俺の心は洗われる。例え一昨日気に食わないことがあると、例え昨日誰かと喧嘩しても、例え今日嫌な夢を見たとして、悠さんと話せば俺は軽くなる。もし俺がこの世でもう一人だけ母親と呼べるなら、俺はこの人を母さんと呼びたい。

「これで全部揃ったわ。恭ちゃんが手伝ってくれたおかげで助かった。」

「これぐらいお安い御用です。こういう時こそ俺みたいな男手を借りて下さいね。」

両手に買い物袋をぶら下げているが然程重くはない。けれど、女の人にとっては意外と堪えるものだろう。いつもは悠璃と半分ずつ持っているのかもしれない。こんな華奢な腕をしているのにいつも力強く感じるのは内面的なものなのだろう。

「恭ちゃん…。」

ふと悠さんを見てみると目を潤ませて何故か上気だっている。妖艶だ。

「ど、どうしたんですか？」

「いつの間に女を口説けるようになったの？ああ恭ちゃんが私をそんなに想っていてくれたなんて嬉しいわ。」

「く、口説く！？ええ！？」

俺はただただ困惑した。俺は生まれてこの方女を口説くことはもちろん告白だっただけだ。まして悠璃の母親を口説くなんてもっての他である。

「私はまだオンナよ。恭ちゃんさえよければ…。」

「よくありません。」

「意地悪。」

「意地悪で結構です。」

「そういうこと言うと今日のおかずのハンバーグあげないんだから。」

その一言で俺の中の何かが崩れ落ちた。

「……………ぐすんっ……………うう……………」

目からは熱いものが零れ出た。すると俺の頭の上に柔かくて温かいものが置かれた。それは悠さんの手のひらだった。

「よしよし、いい子は泣かないの。ママもちよつと意地悪だったね。ちやあんとママの特製ハンバーグをあげるからね、よしよし。」

「……………ひつぐ……………ホント？」

「……………ひとつだけお願い聞いてくれないわよ。」

「お願いって何？」

悠さんの手が俺の頭をふわりと撫でる。

「それはね……………」『ママ、大好き』って言ってほしいの。できる？」

「うん、できる。」

ハンバーグ。

「ママ、大す…。」

「何を言わされてんだあ…!!」

「へぐっ!？」

亜音速に達した何かが俺を直撃した。一瞬意識が飛んでしまった。

「ゆ、悠璃。…ハッ!?俺は一体何をしようとしてたんだ。」

ぶっ飛んで来たのは悠璃のカバンだった。眉を吊り上げ仁王立ちしてこつちを睨んでいる。怖い。

「何うちのお母さんの口車に乗せられてんのよ。見覚えのある後ろ姿だと思ったら案の定恭とお母さんじゃない。だいたいお母さんも何してんのよ!」

実の母親に向かってその睨みは中々できない。一朝一夕の技ではない。

「恭ちゃん怖いよお。」

俺の後ろに隠れる悠さんだったが、口でああ言っている割には恐そうに見えなかった。このままでは埒が明かないので帰ることにする。

「と、とりあえず帰りませんか?」

「ふん、そうね。」

「うん、恭ちゃんの大好きなハンバーグ作らないとね。」

俺達は横一線に並んで西日で真っ赤になった道を足並み揃えて帰って行く。

背中に背負った影は細く長くまるで、今まで歩んで来た道をなぞるように、そして追い掛けているように俺には見えた。

第5話「隣人の母」(後書き)

お腹が痛い今日この頃です。再三ご注意くださいですが風邪にはお気をツ
けを。

第6話「電柱と後輩」

春が待ち遠しいこの頃、穏やかな日々は続いていた。心なしか暖かさがすぐそこまで近付いている気がする。俺と悠璃は通い慣れた道を歩いている。

「ほへえ。」

「シャキッと歩かないと怪我するわよ。」

「んなこと……へぐつ!？」

「阿呆ね。」

俺は何の罪もない電柱を睨み付けた。

「先輩!」

鼻を擦りながら歩いていると後ろから聞き覚えのある声が飛んできた。

「おはよ彩萌。」

「悠璃先輩おはようございます。」

白瀬彩萌。^{しはいせあやめ}俺達の一つ後輩になる。正直なところ俺にとって後輩になるのかは疑わしい。悠璃と白瀬は仲が良い姉妹のように見える。自然と絵になる二人は学校でも一目置かれる存在だ。ただ始めに言った通り俺との関係は皆無である。もっと碎けて言えば仲が悪いのだとも言える。

「うい白瀬。」

とは言え挨拶は毎日やる。俺自体は白瀬に対して何も嫌悪など抱いていないし、普通に接している。会話は全くないけれど。

「悠璃先輩、今日も綺麗です。」

「うふふ、彩萌こそ今日も可愛いわよ。」

悠璃の腕に抱きついて寄り添う白瀬はご機嫌であった。本当に絵になると俺でも思う。

「二人共突っ立ってないで早く学校に行くぞ。」

「そうね、行きましよう彩萌。」

「はい先輩。」

それなりの余裕を持って学校に登校した。玄関で履き馴れたスニ―

カーを下駄箱にしまう。

「あ、そういえば職員室に回らないといけないんだっとな。んじゃ行ってくるよお二人さん。」

「ねえ彩萌。」

「何ですか先輩？」

私は常々思っていた疑問をぶつけることにした。

「率直に聞くけど恭のこと嫌い？」

「…え？」

彩萌の眉が微かにではあるがぴくりと動いたのが分かった。彩萌はあまり感情を積極的に出すような人ではない。それでもようやく最近になって何となく読み取れるようになったと思う。

「どうなんですかね。たぶん普通です。」

「普通…ね。その割には全然話さないじゃない。」

「男の人があまり得意じゃないんです。」

「そう。ごめんなさい、いきなり変な話をして。」

「大丈夫です。それじゃ先輩私をこれで。」

今の彩萌は何かを堪えているように見える。だから私は一つ布石を置いてこの話を終わりにした。

「あ、もう一つ。私の事は好き？」

「ふふ、ええ大好きです。」

彩萌は自分の教室へと向かった。

私は今の彩萌の言動によって、私が抱いていた疑問が確信へと変わっていった。

「心中複雑ね。」

俺はぶらりと学校の校門へと向かっていた。時刻はもう放課後で、俺は帰路に着こうとしていた。悠璃は今日も評議委員会があるので先に帰ることにした。校門に差し掛かろうとした時、前方に見覚えのある姿を見つけた。

「よつ白瀬。」

白瀬は俺の声に気付いたようでこちらに振り向いた。

「……………」

言葉はいつものように無かったが、俺の見間違いでなかったら軽く会釈をしたように見えた。

「今帰り…だよな。」

「……………」

「いやさ、悠璃のやつ評議委員会で遅くなるからって先帰れって言われてさ……………ははは。」

「……………」

やはり会話に成り立たないと苦しい。半ば俺の独り言にも聞こえ、端から見れば痛い人だ。だが今日はめげない。諦めたら何も変わりはしない。

「な、なあ白瀬。」

「……………」

「一緒に帰らないか？」

「……………」

白瀬は歩みを止めて啞然としている。やはり今日は無理かなと思い俺は大人しく一人で帰ろうと白瀬に挨拶をしようとした。

「俺なんかと帰るの嫌だよな。んじゃ先行くな。また明日。」

もちろん返事はなかったがこれ以上俺が側にいても何にもならないだろうと思い立ち去ろうとした。

「ん？」

と思ったのだが何か俺の制服の袖を引っ張っているのに気が付いた。俺は不思議に思い頭だけ後ろを向いた。

「しら…せ？」

何と白瀬が俺の袖を掴んでいたのだ。意表を突かれた。白瀬は軽く俯いていてはつきりとはその表情は伺えない。それから俺達は黙ったままだった。それが何秒続いたのか何分続いたのかは分からない。

「ど、どうしたんだ白瀬？」

やっと口から言葉が出た。その言葉だけで精一杯だった。

「…そ…その…い、一緒に…帰っても…い、い…いいです。」

言葉に詰まりながらも白瀬は俺の言葉に返事をした。それはとても儂げで、細く、美しい小さな声であった。それでも俺にははつきりと聞こえた。だから俺はその声に聞き入れそうになりながらも、白瀬が不安がらないように直ぐに返した。

「うん、そっか。なら一緒に帰ろう。」

「……………」

白瀬は言葉はないものの軽く頷いていた。二人並んで歩くなどということはもちろんしない。というか無理だ。俺と白瀬は微妙な距離で歩いた。俺の方が一歩半前に出る形だ。横目で白瀬を見ると白瀬も気になるのか俺と目が数回あった。その度に目を逸らした。俺らは付き合い始めの中学生のカップルかと思ったのは内緒だ。

「ほへえ。」

「シャキッと歩かないと怪我するわよ。」

「んなこと……へぐつ!？」

「二日も続けてなんて阿呆ね。」

俺は昨日に続き何の罪もない電柱を睨み付けた。しばらく歩くと足音と聞き慣れた声が飛んで来た。

「先輩。」

白瀬だった。

「おはよう彩萌。」

「おはようございます悠璃先輩。」

昨日は一緒に帰ったせいかな何となく気不味い。その為か白瀬への挨拶が上擦ってしまった。

「う、うい白瀬。」

「……。」

返事はない。

「何緊張してんのよ。彩萌こんな阿呆相手にしないで先にいくわよ。」

「あ、はい先輩。」

「ま、待てよ!？」

悠璃と白瀬は俺を置いて行こうと先に歩き出した。俺も慌てて歩き出そうとした時俺の横を通った白瀬が何かを口にした。

「…おはよう……ございます……。」

やはり小さな声ではあったがはっきりと聞こえた。そして俺の見間違いでなければ白瀬は微笑んでいた。

「って俺を置いてくなよ。」

急いで二人の元へ足を向けた。すると白瀬の髪が一瞬のそよ風に煽られ舞った。白椿のように咲いた白瀬の髪は美しかった。俺はそれ

に見入ってしまった。

「へぐつ!？」

俺はまた罪のない電柱をしばらくの間ただただ睨んでいた。

第6話「電柱と後輩」（後書き）

大変遅くなりました。言い訳はしません。次は少しでも早く皆様のご覧になれますよう頑張ります。

滑らかな声で

俺は一言で言えば憂鬱であった。まさかあれがあらうとは微塵も考えていなかった。季節はもうすぐ桜の季節になろうとする頃である。

「恭、帰るよ。」

「……………」

俺は頭を垂れてうなだれる。

「ふーん、私のこと無視するのね？」

「……………」

やはり行くべきなのか、それとも意を決して逃げ出すべきなのか。

「む、無視するなあ！」

「……………」

どちらを選択しても面倒には変わりはない。

「恭のくせに…恭のくせに…」

「ん、悠璃。何ぶつぶつ言ってるんだ？」

どういう訳か悠璃は俺の隣で何かを口にしていた。どこか臆気である。俺の声に

気付いた悠璃は直ぐに俺を睨んだ。

「ア、アンタが悪いんでしょ！いいから帰るわよ。」

「ああ、悪いこれから委員会があるんだ。今日は先に帰ってくれ。」

「そうならそうと先に言え！この阿呆！」

「ぐへっ！？」

顔を思い切りカバンで叩かれたせいで、俺の身体は大きく揺らいだ。それと普通に痛かった。それから俺が悠璃の姿を確認しようとした時にはもうその姿はなかった。とは言え俺は委員会に出席することにしたのでのんびりもしてられない。

「んじゃ行くか。」

俺は第三会議室へと向かった。

「来てしまった…。」

俺は今第三会議室の前にやって来た。つい先程までは意を決して向かっていたのだが、いざこうして来てみると迷ってしまう。しばらく俺が悩んでいると後ろから今一番聞きたくない声が聞こえて来た。

「あら、私より早く来るなんて良い心掛けですね。」

「委員長。」

我が委員会を取り仕切る委員長の御水雛子。みすいひなこ俺とはクラスは違うが同学年だ。さて、ここからが本題である。俺は詰まり何の委員会に属しているかだ。

「全員揃いましたね。」

気付けば俺は既に第三会議室の中へと入り、椅子に座っていた。

「全員って言っても俺と雛しかいねえだろうに。」

「私語は慎むように。」

言葉とは裏腹に目力が強い。俺は黙ってしまった。

「こほんっ、ではこれより『第三会議室委員会』を始めます。」

「はあゝ。」

俺は一つ深い溜め息をついた。最近ようやくこの委員会の名前につ

いて突っ込むのはやめた。

「あのさ、雛。」

「何ですか副委員長？」

ちなみに俺は副委員長だったりもする。

「今日は何をするんだ？」

「さあ？」

「…んじゃ今日はかえりましょう。」

「そうですね、帰りましょう。」

俺はもう溜め息をつくこともできないぐらいに疲れていた。俺の貴重な放課後を返して欲しい。今だにちゃんと何かをした試しのない委員会が何故存続しているのかは、俺には全くと言っていい程分からなかった。

「あのさ雛、ちょっと質問していいか？」

「何ですか？今日は質問が多いですね。」

俺と雛は委員会を片付けて帰っている途中だった。

「何で俺らの委員会って二人だけなんだ？」

「さあ？どうしてでしょうね。」

「いやいや、そこ知ってないとまずいだろ。というか俺らの委員会
は一体何をする委員会なんだ？」

雛は可愛いげに首を傾げて少し考えている。その仕草に騙されそう
になったが、さらに俺は問い詰めた。
しばらくすると雛は答えた。

「そんなことも知らなかったんですか。全くダメな副委員長ですね。
えっとですね……………ひ、秘密です。」

「ちょっとまで、その間はなんだ。」

あからさまに目線を泳がせる雛はかなり怪しく、いきなり歩く速さ
も上がっている。逃がすまいと俺は雛の手を掴んだ。

「あ…。」

「こら逃げるな。」

「掴まっちゃいました。」

雛は舌を軽く出して、悪びれた様子で観念したようだ。夕日が丁度
逆光になって雛の顔はよく見えなかったがそれだけは分かった。

「雛も知らないとはな。委員会必要ないん…。」

「要りますよ。必要です。」

俺が言い終わるよりも先に雛が少し強い口調で話した。先にも言ったが夕日の逆光で雛の表情は読み取れないが、きっと雛は真剣な筈だ。

「そっか。分かった、俺は雛が必要だと言うなら俺は何も言わない。雛がそう言うならそうなんだろ。」

俺はこれ以上は何も言わずにまた歩き出した。

雛も何も言わずに歩き出した。

実際、雛が何故そう言ったかは分からない。

ただ必要だと雛は言った。そうであるならそうなのだ、と俺は思った。それだけのことで簡単なことだ。所詮自分以外は他人である。その他人の真意を読み取るのは容易くはない。俺には難しい。そんな俺に出来ることと言ったら、そいつの言葉を信じてやることだけだ。それぐらいしか俺には出来ないのだから。

「悠ちゃんとは上手くいつてるんですか？」

滑らかに雛は語り出す。俺はいつもこれに吸い込まれそうになる。

「良好良好。幼馴染みな関係を満喫してるよ。」

「そうですね。悠ちゃんは美人さんですから恭は嬉しいんじゃない

ですか？」

俺は軽く目眩がした。顔が赤くなっているだろう。

「顔が真っ赤ですね。厭らしいです。」

「…ちげえよ、ばーか。」

「ぶいつ。」

ちよつとだけ不機嫌になった雛はつかつかと歩くペースを上げた。それからくるりと回れ右をして、俺の方を向いた。

「また明日です。」

「ん、うい。」

俺も軽く手を挙げた。しばらく雛の後ろ姿を見送った。刹那の風が舞い上がる。

「ピンクか。」

そして必死にスカートを後ろ手で抑える陰影が一つ。

「ごちそうさま。」

腹が脹れたところで俺も帰路へと着いた。

「雛に名前で初めて呼ばれたな。…さてと俺も帰るか。」

俺が真っ赤になった理由、あの雛の滑らかな声で名前で呼ばれたこと。意外と反則だなと思った。

ふと時刻を見るために携帯を覗いた。

着信 14 件 悠璃

「……今日は野宿の方がいいかもな。」

滑らかな声で（後書き）

大変遅れました（約半年間放置） m () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5966d/>

そんな二人は運命共同体

2010年10月30日10時13分発行